

わたしたちの物語　くわたしの青春はいつどこにく

河原　正實さん・幸子さん　&　王子光照苑高齢者あんしんセンター職員

東十条でお店やってね、化粧品店やって、化粧品業界の役員もしてたし、町会の役員もして、商店街の役員もして。いろんなことやってるうちに、もう子ども成長しちゃって。

私自身も六十歳になったんで、商店街、町会の仲間、仲良くしてた人々と、六十歳になんか思い出になることしたいねって言ったら、ちよūdごその時、東海道五十三次の、講談社から出た一冊の本があったんです。

その本一冊を頼りに、じゃあ東海道、金かけないで歩いちゃおうって。

四人でね、ええ、その、行くためには一日どれくらい歩けるか。試しに、荒川の河口まで歩いてみようって、東十条の町会会館から江北橋まで行って、土手一本でずっと歩いていったんです。

そうしたら、その土手歩くと、東京湾まであと何キロ、あと何キロって、掲示板が出ててね。

それにその付近の物語やなんか書いてあるんです。それ眺めてるのも楽しいなって言いながら、どんどんどん歩いて、歩いていくといろんな人と出会うから、おしゃべりもするし。そういうようなことしながら東京湾まで。

荒川まで歩けるんなら、一日大体二十二、三キロ歩くつもりで。

川崎まで歩いて家に帰って、次は川崎から大磯まで歩いて帰って、大磯から小田原、小田原から箱根と、それを歩いているうちに、

私たちも一緒に行きたいつう奥さんが何人か出てきて、うちの女房もね、一緒に行くっていう。

そしたら、その話を聞いた町会の他の連中も行きたいって、全部で十二、三人に膨れ上がって。

それで、ただ行くのはもったいないからって、旗をこしらえて。一理塚ごとにね、その旗開いて。

五つの旗を、最後の時みんな分けて。

それで、その東海道の時の旗にはね、京都三条大橋って旅館に泊まった時に、みんな一言ずつ書いたんです。

『青春とは年齢の一部分をいうんじゃないかって、一生涯のうち、自分が一番燃えていた時が青春である』と。

片山総理大臣が言った言葉をこう書かしてもらったんです。

今八十六歳ですけど、実際には六十過ぎてからの楽しい思い出が多いですね。

だけど、寝てるとね、十七、十八歳以下の自分探しをした頃の夢はよく見ます。

途中は飛んじやいました。

それで、最後友達とまた楽しい事やって、人生八十何年経って。楽しい人生だったと思います。

やっぱり人と触れ合うことと、人とおしゃべりすることとか。

楽しい思い出はまだ年齢関係なく、こういうことしようよ、こういうことしようよって、

そういうことを考えながら。

限られた時間をいうんじゃないかって、

自分の一生のうちで一番燃えたときが青春だって、

やはり人生一度燃えるときがあるって。

その通りだと思いますね。

私たちは六十過ぎてから青春になったんだって。

みんなで万歳、万歳。京都三条大橋で。

これが青春じゃないかって感じ取りましたね。

